

翻訳と書き換え——「死とコンパス」序説

柳原 孝敦

はじめに

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの数ある短篇の中でも、とりわけ「死とコンパス」(『伝奇集』所収)は読者を魅了してやまない一篇である。これを脚色し映画化したアレックス・コックス(『デス&コンパス』メキシコ、日本、アメリカ合衆国、1996)は日本公開時、舞台挨拶の際の質疑応答の時間に、自分以前にこれの映画化を試みたある人の脚本を見たことがあるが、あまりにも分厚く、このまま映画化したら数時間におよびそうなほどだったと回想したものだが、決して長くないこの短篇小説をそんな分厚い脚本にまとめるほど熱心に映画化を計画した(そして挫折した)人物というのは、あるいはビクトル・エリセだったかもしれないとの予想が成り立つ⁽¹⁾。「死とコンパス」は映画人をも魅了するものだ。

探偵小説仕立てである「死とコンパス」の、探偵が自らの推理に溺れ、本来存在しなかったはずの論理を組み立てるという発想は、たとえば同国の後輩作家ギジェルモ・マルティネスの『オックスフォード連続殺人』にも見られる。これを「死とコンパス」に着想したものとか、その書き換えだと断定するのは早計に過ぎるかもしれないが、少なくともそうした予想は成り立つ。

最近では、今福龍太がこの短篇を巡り、コンパスという器具を手がかりに「ブエノスアイレス建設の神話」(というタイトルのボルヘスの詩)やボルヘス自身の出自に遡り、都市と作家個人の歴史に切り込む壮大な解釈を展開している(今福:149-79)。「迷宮」というボルヘスに対する紋切り型とも言える概念をも新たな光で照らし出して刺激的だ。

しかしながらここでは、この「死とコンパス」という短篇にアプローチするためのもうひとつの重要な経路について論点を整理したいと思う。つまり、小論はこの作品を読むための事前準備である。「死とコンパス」論ではない。あくまでも「序説」である。

翻訳論的アプローチ: Kristal

Efraín Kristal (1999; 2002) はスペイン語による論文と英語による書籍のふたつの形式で「ボルヘスと翻訳」を論じている。なるほど、自ら翻訳家でもあったホルヘ・ルイス・ボルヘスではあるが、その翻訳について語るべきことは多く残されているように思う。ところが、ボルヘスは翻訳に関するその思想をまとめた論文の形で展開しているわけではない。その考えをまとめようとすると、彼が折に触れて書いた断片の数々からその考えを

再構成するしかない。ここではよりコンパクトに箇条書きされたスペイン語版（1999）のまとめを借りることにしよう。同様のことは英語版第1章および第2章最終節（Kristal 2002: 30-5; 87）でも展開されている。いずれにしろ、Kristal によれば、ボルヘスの翻訳論は以下の3点に要約されうる。

- 1) 翻訳はひとつの言語からもうひとつの言語への逐語的な移行ではなく、ひとつのテクストのある局面を保持しながら変形させる作業である。逐語訳は細部を保持するだろうが、大胆な言い換えは意味を保持する。意味を保持した翻訳の方が細部を保持した翻訳よりも原作に忠実であるということはある。
- 2) ひとつの言語内でも翻訳がなされることはある。
- 3) 翻訳が原作よりもよくなることはある。（Kristal 1999: 3-4）

これに続けて「その翻訳においてボルヘスは原作の細部や、場合によっては長い断片を割愛して強調すべき箇所を変え、翻訳を新たな作品として作り替えている」（10）と指摘して Kristal は現実のボルヘスの翻訳作品を分析している。さらには、「ボルヘスの翻訳は発想の源泉と自らのフィクションを繋ぐ環である」としてアドルフォ・ビオイ＝カサーレスと共訳したポーの「盗まれた手紙」を分析し、『盗まれた手紙』のデュパンと大臣は『死とコンパス』のレンロットとシャルラッハの原型をなす。というのもしずれの短篇も探偵の大胆さや思考能力と犯罪者のそれとの関係が問題になるからだ。両者が過去において対決し、それが因縁となり、未来の対決とその顛末を生み出すからだ」（13）との観測を述べている。

同様の見解は英語版（103-11）でも展開されている。書籍であるこの英語版では、この立場をさらに敷衍し、「トレーン・ウクバール、オルビス・テルティウス」、「不死の人」など、8作品の源泉をボルヘス自身の翻訳作品に認めている。

ところで、Kristal は、翻訳を巡るボルヘスとレイエスの関係にも言及している。両者の関係に大に関心を持つ私たちとしては、一瞥をくれておこう。ボルヘスは師と仰ぐアルフォンソ・レイエスによるチェスタトンの翻訳をことのほか気に入っており、友人アドルフォ・ビオイ＝カサーレスとともに推理小説アンソロジーを編んださいに、レイエス訳「イズレイル・ガウの誉れ」を改変した自分たちの版として組み入れている。Kristal はその後、ボルヘス（とビオイ）がレイエス訳のどこをどのように改変したかをたどっている（Kristal 2002: 67-70）。

しかし、残念ながら Kristal はレイエス自身の翻訳論には言及していない。ボルヘスと異なり、レイエスは「翻訳について」という文章を書いている。蛇足ながらここで、レイエスの態度を確認しておこう。レイエスの「翻訳について」は1944年、アルゼンチンで出版された『文学的経験』のひとつの章として書かれたものだ。

アルフォンソ・レイエス「翻訳について」の基本姿勢は「翻訳に関しては何らかの全面

的な主張をするのは危険だ。すべては好みという揺り椅子の問題だ。人に伝えるのが難しく法制化も困難なこの創造の要素に関わるものでなければ、翻訳がこれほど偉大な作家たちを誘惑することもなかっただろう」(Reyes 1944: 90) という一文に端的に表明されている。彼自身が何らかの理論をドグマティックに標榜し展開するというよりは、翻訳において生ずる問題を列挙したものである。逐語訳か文学性か、単一言語内の翻訳、翻訳不可能性と可能性、などの問題を網羅して、自身の翻訳や他の作家たちの翻訳の苦労話を絡めつつも手短かに問題を整理している、いかにもレイェスらしい文章だ。

頻繁に本を献呈し合い、コメントの手紙のやりとりをしていた両者であるし、ましてやボルヘスはレイェスを師と仰いでいた。ボルヘスがこれを読んでいたとしてもおかしくはない。ただし、問題整理に徹するレイェスのエッセイがボルヘスの翻訳観に影響を及ぼしたとか及ぼさないとかいったたぐいの断言はできない。

翻訳と創作の間：Waisman

もうひとりボルヘスの翻訳を論じているのが Waisman (2005) である。Kristal 以後にこの問題に取り組んだ Waisman の前者との最大の差異は、アルゼンチン文学の文脈に広げていることと、ジェームズ・ジョイス作品との関係を大きく扱っていることだろう。ただし、これらの点は、今、私たちには関係してこない。

ボルヘス自身の翻訳についての考え方を取り上げるに際し、Waisman は Kristal とはいささか異なる局面に焦点を当てている。ベアトリス・サルロから「ボルヘスにとって文学修行は翻訳と書き換えから発してなされるものであり、このふたつはテキストを生成するための最大の様態なのだ。この原則はもう一つの原則によってのみ正当化される。オリジナリティというのに美的価値はない、という原則だ」(Waisman: 102 孫引き) の一文を抜いた Waisman は、翻訳、書き換え、創作を一連の流れとして理解する態度を示している。ボルヘスが翻訳において原作の一部を削除したり書き換えたりするのも、ボルヘスが「決定版」というのは存在せず、すべては草稿であり版であるという考え (47)、創作理念を持っているからだというのだ。自ずと、テーマは翻訳そのもののみでなく書き換えの問題へも滑り込んでいく。

Waisman はその書で「死とコンパス」を大きく焦点化することはないが、それでも、以上のような態度から、この短篇へのひとつのアプローチを照らし出していることも間違いない。翻訳が翻訳のみの問題でなく、書き換えの問題であり、それが創作へと通じる道だとするのなら、ボルヘスは自身、書き換えと「死とコンパス」についてひとつの大きな示唆を残しているからだ。Waisman の原書 (英語版) は “The Irreverence of the Periphery” という副題を持っている。ここに記されている irreverence の語は、ボルヘスの講演に基づくエッセイ「アルゼンチン作家と伝統」から引かれたものである。というのも、ボルヘスはその講演＝エッセイを「だからわれわれは、迷信にとらわれることもなく、めでたい

結果をもたらしうる、そして現にもたらしめている一種の不敬でもって、ヨーロッパ的なあらゆる主題を扱うことができるのである」(邦訳：240)と結論づけているのだから。翻訳に言う「不敬」がすなわち *irreverencia* (273)、英語で言う *irreverence* のことである。このエッセイ「アルゼンチン作家と伝統」こそが Waisman がボルヘスの翻訳をアルゼンチン文学に結びつけるための重要なキーでもあり、「死とコンパス」へのアプローチにとっても重要な証言でもあるのだ。どういうことか？

エッセイ「アルゼンチン作家と伝統」は、表題に掲げた設問に対し、1) アルゼンチン作家はアルゼンチン文学の伝統を受け継ぐべきである、2) アルゼンチン文学にとっての伝統はスペイン文学である、3) アルゼンチンはそれらとの断絶を生きている、という3つの主張を批判的に検証して否定し、アルゼンチン文学にとって伝統とは西洋文化全般のそれであるとの結論を導くものだ。

たとえばアルゼンチン作家はアルゼンチンの伝統を受け継ぐべきだとの主張において想定される「アルゼンチン文学の伝統」を代表するものに、パンパの牛追いガウチョを扱ったガウチョ詩があるが、そこで描かれる風景や、ガウチョたちの語法は詩人たちによってきわめて人為的に作られたものだというのがボルヘスの見解である。そしてまたこのガウチョ詩の伝統を受け継いだとみなされる傑作(「ナショナリスト必携のバイブル」[235])であるリカルド・グイラルデスの『ドン・セグンド・ソンプラ』が同時代および過去のフランス語や英語による文学との密接な関わりが強調されている。つまり、アルゼンチンらしさのひとつの大きな指標であるはずのガウチョについての記述が、翻案に基づいているということなのだ。

典型的なナショナリストの言説に対して広くヨーロッパ文化全般を吸収する権利を訴えるこの態度は、たとえばその少し前に隣国ブラジルでオズワルド・ヂ・アンドラーヂが発した「食人宣言」を想起させてあまりある。また、ここでも私たちの問題関心から、アルフォンソ・レイェスをふたたび思い出しておく必要もあるだろう。「普遍的メキシコ人」などと形容されるレイェスには、西洋文化全般が自分たちの継承すべき伝統だとする考え方を折に触れて表明しているが、代表的なものとして彼が1932年リオ・デ・ジャネイロの大学で行った講演を基にした「ポリスのアテナ」(Reyes 1932)を挙げておこう。大学改革という与えられた講演のテーマに対し、「改革」の名が示唆するような断絶を訴える論調に疑義を呈したレイェスは、文化とは伝統であり、それも世界をひとつとみなそうとする伝統であるのだから、そうした伝統を継承するのが文化の伝承地としての大学のありかただと説いている。狭隘なナショナリズムに対置してアルゼンチン作家が引き継ぐべき伝統は広くヨーロッパのものであるとするボルヘスの「アルゼンチン作家と伝統」は、アンドラーヂやレイェスらブラジルで発されたこれらのテキストとの関係においても読まれるべきだろう。

ところで、「世界文学」の概念を広く知らしめたデイヴィッド・ダムロッシュは、そのさまざまな理論を編み、一種のリーダーを作っているが、そこにおいて「アルゼンチン作

家と伝統」を「世界における世界文学」の部の劈頭（391-7）に掲載している。この見地を延長してレイェス、アンドラーヂらを結んでラテンアメリカの立場からの世界文学の見取り図を描くのも一興であろう。それは壮大な試みになろうから、今後の課題としてあげるにとどめておくが、とにかく、ボルヘスのこのエッセイが世界文学の概念を考える上でも重要であることは認識しておいて良い。

さて、ではこの「アルゼンチン作家と伝統」が、どんな点において「死とコンパス」へのアプローチにとって重要なのか？ それはこの短篇についての言及がエッセイ内にあるということだ。上に述べた、「ガウチョ詩」が人為的なものであり、その延長線上にある『ドン・セグンド・ソンプラ』が英仏詩の翻案・書き換えに基づくものだとする文脈上でのことだ。

私事にわたって恐縮だが、ここでひとつ打ち明け話をさせて頂きたい。私は長年の間、幸いにも今では忘れ去られているいくつかの短編において、ブエノスアイレスの場末の風趣を、その精髓を書きとめようと努めた。当然のごとく方言をふんだんに盛りこみ、ナイフ使い、ミロンガ、土堀といった類いの言葉をも忘れることなく、あのようないくつかの忘れられるべき、そして忘れられた短篇を書いたのである。その後しばらくして、そう今から一年ほど前〔一九四二年〕、『死とコンパス』と題する物語を書いた。これは一種の悪夢、悪夢の恐怖によってデフォルメされたブエノスアイレスの諸相が現れる悪夢といえるものである。私はコロン街に思いをはせて、物語の中ではそれを「トゥーロン街」とし、アドロゲにあったホテル・ラス・デリシアスを「トリスト・ル・ロワ」と呼んでみた。この物語が出版されると、友人たちは私が書いたものの中に、やっとブエノスアイレス郊外の風趣を見出すことができたと言ってくれた。まさしくその風趣を意識的に探求しなかったがゆえに、夢に身を委ねたがゆえに、私はやっとのことで、以前あれほど求めても叶わなかったものを獲得することができたのである。（「アルゼンチン作家と伝統」邦訳：235。〔 〕内は訳注）

アルゼンチンのアルゼンチンの伝統とみなされているものが、実は翻案や書き換えであることを述べた文脈上でこうした自身のエピソードを語るボルヘスは、つまり、土地や通りの名をそのまま使うことが、あるいはブエノスアイレス風の名にすることがブエノスアイレスらしさを表現することになるわけではないことを実地に体験したと述べているわけだ。翻訳論の文脈で言うと、逐語訳でなく内容や作品の風味といったものを他言語に変換する局面こそが重要視されるべきだという主張に対応するものとみていい。これは「アルゼンチン作家と伝統」という設問への答えであると同時に、翻訳論上の態度表明でもあるだろう。

言語選択：旦

上に引用した「アルゼンチン作家と伝統」のエピソードは言語と描く対象の橋渡しとしての書き換え、翻訳の問題についてのボルヘスのひとつの態度を提起しているわけだが、同時に、作家が描きたいと熱望したものが「死とコンパス」によってはじめて実現されたのだという意外な事実をも伝えるものである。

ボルヘスが描きたいと熱望したものという時、旦敬介の予想（旦 2006）を思い出さないではいられない。旦の予想は言語選択を巡ってのものであり、言語選択というのが翻訳や書き換えにとってもひとつの重要な要素としてかかわってくる以上、ますますここで想起しないわけにはいかない。

旦敬介は、ボルヘスがスペイン語よりむしろ英語に通じていたと思われること、環境からみても英語で書く作家になっても不思議ではなかったことなどを紹介しながら、「ある時点で意識的にスペイン語の作家になることを選んだ人だった」（192）と推測する。

旦があるところでこうした見解を示したところ、なぜボルヘスはスペイン語で書く選択をしたのかと訊ねられたことがあるという。それに対しては、まずはトマス・エロイ・マルティネスがボルヘスから聞いた話というのを繰り返してみただけだそう。つまり英語は家族など親密な相手と話す神聖な言語であって、不特定多数に対しては使えないのだと。ボルヘス本人はそう説明したのだという。旦敬介はこの説明を繰り返しつつ、そこに自分自身の見解を加える。「若きボルヘスはガウチョものの作品を書きたかった、けれどもそれには英語は不適切だったのではないか」と。

ボルヘスにおける最初の創作が「薔薇色の街角の男」という「ガウチョもの」だったことは旦の推測を裏付ける証拠になりそう。ガウチョものとは、ボルヘス自身が論じているガウチョ詩のことではなく、「僕」すなわち旦がそうまとめている類の作品群で、「ブエノスアイレスの場末街をうろつくやくざ者たちや、荒っぽい田舎の牧童たちの世界をきわめてシンプルな筋立てとして切り出した作品」（193）だという。必ずしもガウチョ（牧童）が中心的登場人物である必要はない。酒場での喧嘩や（ナイフによる）殺し合いなどがクライマックスに来る、知的というよりは暴力的な内容の短編を、旦は「ガウチョもの」と呼んでいるようだ。ロセンド・ファレスとフランシスコ・レアルの酒場での喧嘩、後者の殺害を扱った「薔薇色の街角の男」は、旦の分類によれば紛れもない「ガウチョもの」であり、ボルヘスはこの作品を皮切りに短編小説の世界に乗りこんでいったのだ。

なるほど、ボルヘスの中にあるナイフと殺し合い、ならず者たちのモチーフへの憧れがボルヘスの創作言語選択の動機になったという予想は興味深い。事実、旦は引用していないが、私たちが上にみた「アルゼンチン作家と伝統」においては作家自身、長年、「ブエノスアイレスの場末の風趣を、その精髓を書きとめようと努めた」と告白している。しかし、「方言をふんだんに盛りこみ、ナイフ使い、ミロンガ、土堀といった類いの言葉をも忘れることなく」書いたそれらの作品が「幸いにも今では忘れ去られている」そして「忘

れられるべき」でもあるというのは皮肉だ。土地の名をフランス語風にしたり、人物の名も英名、ドイツ語名いりまじりの「死とコンパス」にいたってはじめてその「風趣」、「精髓」は読者に伝わったというのだから。

もちろん、この試論の文脈に照らして言えば、「死とコンパス」こそが初期のボルヘスが熱望し、その望みをついに達成した作品と位置づけるべき、との結論が得られるだろう。それはまた言語選択、翻訳、書き換え（および同一言語間翻訳）といった問題からのアプローチがこの作品に対しては可能だということでもある。これらの問題はボルヘスその人の創作を考える上でも必要なトピックであろうが、同時に世界文学の理論の点でも重要極まりないものである。

* 本研究ノートは2018年9月26日、日光ホテル千姫物語で行われたJapan-Latin America Academic Conference 2018 in Nikko (2018年9月25-28日開催)の第2セッション 文学1: Borges and Translation における口頭発表をまとめたものである。発表はこのセッションにおいてはいずれもスペイン語でなされた。

注

(1) アレックス・コックスの発言は筆者が上映会場で聞いた記憶に基づくもの。エリセが「死とコンパス」の映画化を試み、脚本まで書いたという事実は、筆者がフランス映画社社主、柴田駿・川喜多和子宅でのパーティーで（1993年、『マルメロの陽光』のプロモーションのための来日時）本人から直接聞いたもの。コックス、エリセそれぞれの発言の日時についての細かい記録は残っておらず、痛恨の極みである。

文献一覧

Borges, Jorge Luis, “El escritor argentino y la tradición”(1943), *Discusión* (1957), *Obras completas de Jorge Luis Borges*, Tomo 1 (Emecé: 1989), pp. 267-274 (邦訳：ホルヘ・ルイス・ボルヘス「アルゼンチン作家と伝統」『論議』牛島信明訳〔国書刊行会、2000〕、227-242 ページ)

—, “La muerte y la brújula”, *Ficciones* (1944), *Obras completas*, Tomo 1, pp. 499-507 (「死とコンパス」『伝奇集』鼓直訳〔岩波文庫、1993〕、179-199 ページ)

Damrosch, David ed., *World Literature in Theory* (John Wiley & Sons, 2014)

Kristal, Efraim, “Borges y la traducción”, *Lexis* XXIII, 1 (1999), pp.3-23.

—, *Invisible Work: Borges and Translation* (Vanderbilt UP., 2002)

Reyes, Alfonso, “Atenea política”(1932), *Última Tule, Última Tule y otros ensayos*, Selección y prólogo: Rafael Gutiérrez Girardot, Cronología: Anja Maria Erdt y Gutiérrez, Bibliografía: James Willis Robb y Gutiérrez (Biblioteca Ayacucho, 1991),

〈研究ノート〉

pp. 248-63.

—, “De la traducción”(1944), *Teoría literaria: Colección Capilla Alfonsina*, Prólogo de Julio Ortega (Tecnológico de Monterrey / FCE, 2005), pp. 89-112.

Waisman, Sergio, *Borges y la traducción: La irreverencia de la periferia*, Traducción de Marcelo Cohen (Adriana Hidalgo editora, 2005)

アンドラーヂ、オズワルド・ヂ、「食人宣言」(1928) 居村匠訳・改題『美学芸術学論集』13 (2017)、112-25 ページ。

今福龍太、『世界を読み解く一冊の本 ボルヘス伝奇集——迷宮の夢見る虎』(慶應義塾大学出版会、2019)

旦敬介、「ガウチョしゃべり、アフリカしゃべり——翻訳したくなかったもの」岩波書店編集部編『翻訳家の仕事』(岩波新書、2006)、191-7.

チェスタトン、GK、「イズレイル・ガウの誉れ」『ブラウン神父の童心』中村保男訳(東京創元社、2017) Kindle 版
マルティネス、ギジェルモ、『オックスフォード連続殺人』和泉圭亮訳(扶桑社ミステリー、2006)